

## (六)校旗樹立記念碑の建立

この記念碑建立は、草創期を飾る最大の事業であつた。昭和二年九月、岩手山頂に校旗を樹立したその感激を永久に記念する事業として、その後同地に記念碑を建立する計画が練られていった。すなわち、理事長はじめ職員生徒一同が、一週一銭の寄付貯金をして時を待たしたのである。

昭和四年になつて、鈴木校長は島軒教諭に、樹立記念日の九月五日までに事業を完成させるよう手はずをととのえることを命じた。命をうけた島軒教諭は、六月下旬ごろから、岩手山神社司や石工の川村芳太郎と種々協議し、研究に研究を重ねた。工事は川村が請負い、材料石は運搬のことを考へて、山頂近くから調達することになつた。川村ほか三名の石工が工事にとりかかつたのは、八月十五日であつた。

島軒教諭の克明な記録から拾つてゆくと、八月二十三日に、山頂の三百メートルあまり下で、材料石の荒取りが完成している。それを八月二十七日までに、長さ十一尺五寸、幅二尺、厚さ一尺六寸の大きさに仕上げた。「皇風永扇校運隆昌」という碑文を鈴木卓苗校長が揮毫し、それを持つて島軒教諭が八月二十九日に登山した。この間、天候不順と川村の長男死亡などのため、作業がやや遅れた。島軒教諭は八月三十日に下山し、校長宅を訪問して相談の結果、建立作業日は九月十一日と決まつた。九月十一日は二百二十日の厄日に当つており、当日の登山は心配であつたが、一大決

心のもとに、あえて決行と決めたのだつた。

九月十日午前八時、三、四年の登山隊が出発して、社務所に泊つた。島軒教諭と四年生の高橋兵吉、それに作業人夫三名が、先発隊として午後一時山頂に向かつたが、天候は次第に悪化し、三合目から大暴風雨となつた。風のためときには棒立ちとなり、あるいは呼吸を止められ、苦勞に苦勞を重ねてやつと奥宮に到着したのは午後五時であつた。風雨に打たれたのは下界も同じで、社務所の立木はごうごうと鳴り、雨は滝のように落ちてきた。

翌九月十一日の午前三時、百名の登山隊が、風雨をおかして先発隊のあとを追つた。ところが午前九時、二百二十日の厄日にもかかわらず、頂上の天候が奇跡のように回復し、まったくの快晴と變つた。喜び勇んだ一行は、さっそく碑石運搬の作業にとりかかる。百余名の人員が引綱を手に持ち、第一声の音頭をとると、巨大な碑石があたかも生きもののように動き出した。そのまま気合に乘じて、約三、四十分で三百メートルあまりの距離を引上げ、何の故障もなく目的の場所に到達した。一同は、思わず万歳を叫んだ。

石工と人夫が、二股を建て、滑車をつけた。そして、碑石がゆつくりと直立し始めた。生徒は、この危険な作業には加わらず、そのほかの作業を手伝つた。記念碑の建立が終つたのは、その日のちようど正午であつた。

校旗は学校の象徴である。その校旗を、県下最高峰の靈山に樹立したのは、本校の前途がこの岩手山のように、ますます堂々たるものになるよう

にどの願いからであつた。その快挙を永久に記念するための石碑を、全員の寄付貯金によつて、みづからの手で同じ山頂に建立したことは、本校関係者の共通の願いが、いよいよ確固不動になつた事実を示していた。

### 寒稽古異変？

昭和五年一月の寒稽古には、従来の武道に加えて、英・数・国・漢も登場しているのが注目される。最上級の四年生の中に、上級校志願者が出てきたための異変であつた。

「本年は四年生の級生中往々上級学校に入学せんと希望者もあることとて従来の如く剣道柔道の外に虚弱者には自強術を課し上級学校希望者には国語、漢文、英語、数学の授業をば二時間に亘りて課したり。」（「石桜」十八号）  
担当は次のようであつた。

|     |      |
|-----|------|
| 自強術 | 学校長  |
| 国漢  | 鈴木教諭 |
| 英語  | 灰野教諭 |
| 数学  | 山口教諭 |
| 同   | 高橋教諭 |
| 柔道  | 広島教諭 |
| 剣道  | 島軒教諭 |

なお剣道の稽古には、医専剣道部員も参加して気合を入れてくれた。納会の鏡開きは例年のとおりで、異変はなかつたようである。